

令和元年6月14日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03151

研究課題名(和文)伊豆半島の前期古墳と東日本太平洋岸域の拠点形成に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A BASIC RESEARCH ON THE EARLY-KOFUN-PERIOD TUMULI IN THE IZU PENINSULA AND THE FORMATIVE PROCESS OF POLITICAL CENTERS IN THE PACIFIC COAST OF EASTERN JAPAN

研究代表者

滝沢 誠 (TAKIZAWA, Makoto)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：90222091

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、伊豆半島における前期古墳の調査をつうじて、半島基部に形成された古墳時代前期の政治拠点と東日本太平洋岸域における広域的なネットワークとのかかわりについて検討した。あらたに確認された瓢箪山古墳(前方後円墳)の発掘調査では、同古墳の立地や墳丘構造が伊豆半島の基部を横断する交通路を強く意識したものであることを明らかにした。また、同古墳が築かれたとみられる古墳時代前期後半には、周辺域において集落規模の拡大や外部地域との交流が活発化する状況を把握することができた。これらの成果をふまえ、古墳時代前期後半には、伊豆半島基部の交通上の役割が高まり、その拠点的性格が顕在化したものと結論づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により実態解明が進んだ瓢箪山古墳の特徴とそれを取り巻く在地社会の動向は、古墳時代前期後半における伊豆半島基部(北伊豆地域)の拠点的性格を示すものである。これと同様の状況は三浦半島の基部などでも認められることから、そうした拠点が形成された背景には、半島基部を横断する陸路の重要性が高まったことが想定される。東日本では、前方後円墳を主体とする前期前半から、前方後円墳が面的な分布を拡大する前期後半へという大きな転換の中で、交通路のあり方にも大きな変化が生じていた可能性があり、この点を新資料の増加が著しい伊豆半島の分析をつうじて明らかにした点に本研究の重要な学術的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This research considered the relationship between the political centers formed at the base of Izu Peninsula in the early Kofun period and the wide area network in the Pacific coast of eastern Japan by examining the tumuli built during the period in the peninsula. Our excavation of the newly-found Hyoutanyama Tumulus (key-hole shaped mounded tomb) revealed that both the location and the structure of the tumulus were strongly affected by the traffic route crossing the base of the Izu Peninsula. We can also recognize the expansion of village scale around the tumulus and the revitalization of exchange with the surrounding areas in the latter half of the early Kofun period, when the tumulus seems to have been built. These results lead me to the conclusion that the base of the Izu Peninsula came to play a significant role in traffic system and its importance as a central base became apparent in the latter half of the early Kofun period.

研究分野：日本考古学

キーワード：伊豆半島 前期古墳 前方後円墳 視認性 東日本太平洋岸 拠点集落

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

伊豆半島は、東海地方と関東地方の境界域に位置しており、東日本の太平洋岸域におけるさまざまな交流の結節点として重要な役割を担ってきた地域である。近年、伊豆半島の基部にあたる北伊豆地域と沼津地域では、古墳時代前期にさかのぼる前方後円墳及び前方後方墳の存在が次々と明らかにされている。

従来、北伊豆地域では古墳時代後期の前方後円墳 2 基が知られていたものの、古墳時代中期以前の前方後円墳は確認されていなかった。また、沼津地域でも古墳時代中期後半以降に前方後円墳の造営が想定され、それ以前の大型古墳は西側の富士地域に集中的に営まれたものと考えられてきた。しかしながら、近年における発掘調査の成果は、そうした認識を根本から大きく覆すものである(滝沢誠「駿河における前期古墳研究の成果と課題」『駿河における前期古墳の再検討』静岡県考古学会、2013年)。

とくに、2007～2009年に発掘調査が実施された沼津市高尾山古墳は、古墳時代前期初頭(出現期)にさかのぼる最古段階の大型前方後方墳(約62m)であることが明らかとなり、その保存問題も相俟って、学界のみならず一般市民からも大きな注目を浴びることとなった。また、同じく沼津地域に位置する神明塚古墳は、研究代表者らによる発掘調査(2003年)の結果、古墳時代前期前半の前方後円墳(約52m)であることが判明し、纏向型前方後円墳としての評価も示されている(寺澤薫『王権と都市の形成史論』吉川弘文館、2011年)。さらに、これまで前期古墳の空白域であった北伊豆地域でも、1998年～2014年に三島市向山16号墳の発掘調査が実施され、典型的な竪穴式石槨をとともう前期前方後円墳(約70m)の存在が明らかとなった。加えて、研究代表者らが2015年3月に実施した踏査の結果によれば、向山16号墳のやや南方に位置する函南町瓢箪山古墳も、墳丘長80～90mの前期前方後円墳である可能性が高い。

近年にわかに脚光を浴びることとなった伊豆半島基部における前期古墳の存在は、これまで十分な理解が不足していた東日本太平洋岸域における前期古墳の展開過程と拠点地域の形成に関する貴重な手がかりを提供するものと思われる。とくに、古墳時代前期初頭における拠点地域の成立については、千葉県神門古墳群などが存在する房総半島の東京湾東岸地域に多くの関心が寄せられてきたが、伊豆半島における前期古墳のあらたな発見は、東日本太平洋岸域に成立した拠点地域を広域的なネットワークの中で理解するための基本認識に大きな転換をもたらすものである。また、従来想定されてきた海上交通路だけではなく、半島基部を横断する陸上交通路の存在を重視する近年の議論(東北・関東前方後円墳研究会編『東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク』、2012年)とのかかわりにおいても、伊豆半島基部における前期古墳の存在は大いに注目される。

本研究は、以上のような最新の研究動向を背景としながら、伊豆半島を対象とした前期古墳の基礎研究をさらに推進し、それらを取り巻く在地社会の動向についても分析を加えることにより、半島基部に形成された政治的・経済的な拠点とそれらを結ぶネットワークという視点から、東日本における古墳時代社会成立過程の新たな側面を描き出すことを目指したものである。

2. 研究の目的

本研究では、以下に掲げる2つの個別テーマを設定して研究目的の達成を目指した。

(1) 個別テーマ1: 伊豆半島における前期古墳の出現と展開

函南町瓢箪山古墳については、古墳時代前期の大型前方後円墳である可能性が新たに浮上している。同古墳は、近年調査された三島市向山16号墳とともに、伊豆半島における前期古墳の実態を解明する上できわめて重要な存在とみられるものの、これまでに本格的な調査が実施されたことはなく、その実態は不明のままである。そこで、個別テーマ1では、瓢箪山古墳の測量調査、地下レーダー探査及び発掘調査を実施し、その墳丘形態や規模、年代を詳しく把握することをつうじて、対象地域における前期前方後円墳と交通路とのかかわりを解明することを目指す。

(2) 個別テーマ2: 大廓式土器の移動とその背景

弥生時代後期末～古墳時代前期前半に対象地域で用いられた大廓式土器は、近畿地方から東北地方に及び広範囲に持ち運ばれ、奈良県纏向遺跡でも一定量の出土が認められる。ただし、その分布は東日本に偏在し、他地域に搬入(模倣)された器種の多くは大廓式土器特有の大型壺である。個別テーマ2では、そうした資料をあらためて検討し、大廓式土器の動きの中から対象地域を基点としたネットワークのひろがりを明らかにすることを目指す。また、対象地域内には、古墳時代前期の東日本に広く認められる東海西部系の搬入土器とは別に、畿内系の搬入土器を数多く出土する古墳時代前期の集落(清水町恵ヶ後遺跡など)が知られている。そうした資料を検討することにより、対象地域と外部地域との交流関係を把握し、東海西部系土器、大廓式土器などの動きとあわせた重層的なネットワークの実態を解明することを目指す。さらに、そうした土器の動きとともに、北伊豆地域における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落や墓域のあり方を検討し、当該期における在地社会の動向とその画期を明らかにすることとした。

(3) 本研究では、以上に述べた2つの個別テーマをつうじて、対象地域が古墳時代前期の東日

本太平洋岸域において果たした拠点的作用を実証的に解明し、半島基部に形成された拠点とそれらを結ぶネットワークという視点から、東日本の古墳時代社会成立過程における広域的な交流形態の一端に迫ることを最終的な目的とした。

3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために、本研究では、研究課題にかかわる優れた研究業績と豊富な知見を有する地元自治体所属の研究者を研究協力者に加えて研究活動を実施した。

具体的な方法としては、本研究においてきわめて重要な位置を占める函南町瓢箪山古墳の実態解明を進めるため、各年度において同古墳の考古学的調査を実施した。また、対象地域内における搬入土器や集落の変遷を把握する上で重要と思われる資料の調査を実施した。さらに、そうした活動によって得られた成果について検討するため、各年度において研究代表者及び研究協力者等による研究会を開催した。

以下に各年度における研究の方法と実施状況を示す。

(1) 2016 年度

瓢箪山古墳の調査：2016年9月4日から9月17日までと同年11月11日から11月13日までの計15日間にわたって測量調査を実施した。また、この測量調査にあわせ、2016年9月14日から16日までの3日間、後円部頂において地中レーダー探査を実施した。

資料調査：函南町伊豆通信病院敷地内遺跡出土遺物および函南町来光川遺跡群出土遺物の資料調査を実施した。

研究会：第1回研究会は2016年8月7日に函南町文化センターにおいて開催し、全体の研究計画と役割分担、および当年度の研究計画について検討した。第2回研究会は、瓢箪山古墳の測量調査にあわせて2016年9月17日に開催し、調査の成果について現地で検討を行った。第3回研究会は、2017年3月18日に函南町文化センターにおいて開催し、研究代表者が瓢箪山古墳測量調査の成果を報告するとともに、研究協力者2名（渡井英誉、佐藤佑樹）が北伊豆地域の古墳時代集落や土器に関する研究発表を行った。

(2) 2017 年度

瓢箪山古墳の調査：2017年9月4日から9月23日までの計20日間、墳丘の規模や形態を詳細に把握することを目的として発掘調査を実施した。この発掘調査では、後円部の東側と西側に各1箇所、くびれ部西側に2箇所、前方部の西側と南側（前端側）に各1箇所の計6トレンチを設定して調査を行った。

資料調査：瓢箪山古墳の周辺に分布する主要古墳の踏査を実施した。

研究会：第1回研究会は瓢箪山古墳の発掘調査にあわせて2017年9月16日に開催し、調査の成果について現地で検討を行った。第2回研究会は、2018年3月17日に函南町文化センターにおいて開催し、研究代表者が瓢箪山古墳発掘調査の成果と課題について報告するとともに、研究協力者1名（菊地吉修）が伊豆地域の古墳について研究発表を行った。

(3) 2018 年度

瓢箪山古墳の調査：2018年9月1日から9月20日までの計20日間、前年度に実施した発掘調査の成果と課題をふまえ、発掘調査を実施した。この発掘調査では、後円部の東側と西側に各1箇所、前方部東側に1箇所の計3トレンチを設定して墳丘の調査を行った。また、後円部頂の十字方向にトレンチを設定して、埋葬施設の範囲や残存状況を確認するための調査を行った。

研究会：第1回研究会を2018年7月22日に函南町文化センターにおいて開催し、最終的な研究成果の発表方法について検討するとともに、研究協力者1名（笹原芳郎）がGIS情報を用いた前期古墳の可視範囲について研究発表を行った。第2回研究会は、瓢箪山古墳の発掘調査にあわせて2018年9月15日に開催し、調査の成果について現地で検討を行った。なお、同研究会は、静岡県考古学会東部例会と合同で実施した。

4. 研究成果

本研究によって得られた最終的な成果は、『伊豆瓢箪山古墳の研究』（2019年）と題する研究成果報告書にまとめた。その概要は、以下のとおりである。

(1) 伊豆半島における前期古墳の実態解明

従来、伊豆半島には前期古墳が存在しないとされてきたが、近年発掘調査が行われた三島市向山16号墳は、古墳時代前期の前方後円墳（約70m）であることが判明し、これまでの認識に大きな変更を迫るものとなった。そうした中で、近年作成された赤色立体図により再確認されることとなった函南町瓢箪山古墳の存在がにわかに注目されることとなり、研究代表者らによる事前踏査の結果、同古墳は向山16号墳の規模を上回る前期前方後円墳である可能性が高いと判断された。そのため、本研究では同古墳の実態解明を重要な目的の一つと位置付け、3年間の研究期間をつうじて同古墳の基礎調査（測量調査、地中レーダー探査、発掘調査）を実施した。

調査の結果、瓢箪山古墳は、墳丘長 87m前後の前方後円墳であることが判明し、古墳時代全時期をつうじて伊豆半島最大規模の古墳であることが確認された。当初は、前方後円墳である可能性も視野に入れて調査を実施したが、発掘調査によって検出されたくびれ部付近の状況から、最終的に前方後円墳であるとの認識を得るに至った。今回の調査では、とくに墳丘構造に関する重要な知見が得られ、瓢箪山古墳の前方部は、その西側側面に段構造を伴うのに対し、東側側面にはそれを伴わないことが明らかとなった。残念ながら、後円部の周囲は大きな改変を被っていたため、同様の構造を確認するには至らなかったが、あらたに確認された墳丘の非対称構造は、瓢箪山古墳の立地がその西側直下に想定される半島横断路からの視認性を強く意識したものであろうとの見方を強めることとなった（滝沢・山下・河嶋 2018）。

以上のような成果が得られた一方で、いくつかの重要な課題も残された。今回の調査では、後円部に認められた板状石材の存在から、向山 16 号墳と同様の竪穴式石槨が瓢箪山古墳にも存在することを予想し、後円部頂での地中レーダー探査並びに埋葬施設の確認調査を実施した。しかし、竪穴式石槨の存在を確認することはできず、むしろ部分的に検出された粘土塊の存在から、粘土槨等の埋葬施設が想定される結果となった。また、墳丘の各所でトレンチ調査を実施したものの、古墳の年代を指し示すような出土遺物は一切得られなかった。低平で短い前方部をもつ点や、今回の調査により推定された埋葬施設の構造から、瓢箪山古墳の築造年代は、向山 16 号墳よりも新しく、古墳時代前期後半の範囲に求めるのが妥当と思われるが、その詳細な編年の位置づけを明確にするには至らなかった。こうした課題の解決に向け、今後も引きつづき瓢箪山古墳の調査を進めていく必要がある。

（2）弥生時代後期～古墳時代前期における在地社会の動向

伊豆半島中央部を北流し、その後西流して駿河湾に河口を開く狩野川の流域（田方平野）には、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が数多く知られている。今回あらたに調査を行った瓢箪山古墳は、狩野川の支流である来光川の流域に位置しており、大局的な地形区分によれば、狩野川流域に築かれた古墳であると言える。それら狩野川流域の遺跡が、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてどのように変遷したのかについて、研究協力者の渡井英誉を中心に検討を行った。検討にあたっては、当地域の土器編年にしたがって、弥生時代後期前半を第 1 期、弥生時代後期後半を第 2 期、古墳時代前期前半を第 3 期、古墳時代前期後半を第 4 期とし、主に集落や墓域、および外来系土器の様相について整理を試みた。

その結果、第 1 期には、北伊豆地域の南半部に位置する伊豆の国市山木遺跡に拠点集落としての性格がうかがえることが明らかとなった。つづく第 2 期は、確認されている遺跡数が少なく、明確な動向は読み取れなかったが、古墳時代に入る第 3 期になると、先述の山木遺跡に加え、狩野川と黄瀬川の合流点付近に位置する清水町恵ヶ後遺跡、同熊ノ免遺跡、狩野川河口部の北側に位置する沼津市入方遺跡に拠点集落としての性格がうかがえることが判明した。これらの遺跡では、畿内系、東海西部系、北陸系といった外来系土器の出土が目立つようになり、その中でも入方遺跡は、対象地域内で最も古く築かれたとみられる沼津市高尾山古墳（前方後円墳・墳丘長約 62m）に直接かかわる集落として注目される。ところが次の第 4 期になると、第 3 期に拠点性を示していた集落での活動規模が縮小し、全体の遺跡数が減少する傾向が認められた。その一方で、狩野川河口部に位置する沼津市藤井原遺跡、同御幸町遺跡、狩野川中流域東岸に位置する函南町伊豆通信病院敷地内遺跡において、あらたに拠点的な集落が営まれていく状況を確認することができた。また、第 4 期には、対象地域内で弥生時代中期以来営まれてきた方形周溝墓とは別に、伊豆通信病院敷地内遺跡をはじめとする狩野川中流域の遺跡に円形周溝墓が認められるようになることも明らかとなった。

以上のような、第 1 期から第 4 期にかけての在地社会の動向をまとめると、第 1 期（弥生時代後期前半）に拠点的な集落が営まれていた山木遺跡の周辺に加え、あらたに恵ヶ後遺跡や熊ノ免遺跡、入方遺跡といった拠点的な集落が出現し、高尾山古墳が築かれることとなった第 3 期（古墳時代前期前半）に大きな画期を求めることができる。しかし、今回の研究の結果、つづく第 4 期（古墳時代前期後半）にも大きな変化が生じ、前時期までの拠点集落と入れ替わるように、あらたに狩野川河口部（沼津市香貫地区）と狩野川中流域東岸（函南町平井地区）に拠点的な集落が出現していることが明らかとなった。こうした第 4 期の変化に呼応するように、北伊豆地域では前方後円墳の築造が開始され、まず三島市向山 16 号墳が築かれたと考えられる。詳細な年代決定に課題を残すものの、それについて築かれたのが今回調査を行った瓢箪山古墳であると考えられる。こうした第 3 期から第 4 期への変化は、東海西部地域とのかかわりを示す前方後円墳（高尾山古墳）が築かれた段階から、畿内地域とのかかわりを示す前方後円墳（向山 16 号墳、瓢箪山古墳）が築かれた段階に移行する過程で、拠点集落のあり方にも大きな変化が生じていたことを物語る。とくに、第 4 期の拠点集落と前方後円墳が伊豆半島基部の内陸側に位置している点は重要であり、古墳時代前期後半には、畿内地域とのかかわりの中で半島基部の横断路（陸路）がより重視されるようになったことが考えられる。

（3）伊豆半島の前期古墳と東日本太平洋岸域における拠点形成

本研究の結果、あらたに確認された瓢箪山古墳は、主要交通路（陸路）に面した西側にのみ段を設けた非対称の墳丘構造を有し、古墳時代前期後半に築かれた墳丘長約 87mの前方後円墳とみられること、在地社会の動向を分析すると、古墳時代前期前半から前期後半にかけて

拠点集落の移動が認められ、北伊豆地域に前方後円墳が築かれたとみられる前期後半には、瓢箪山古墳の西側直下に位置する伊豆通信病院敷地内遺跡に拠点集落としての性格がうかがえること、が明らかとなった。

これらの成果をふまえ、研究協力者の佐藤佑樹と笹原芳郎を中心に、駿河部地域及び伊豆地域における前期古墳の立地や視認性についてさらに検討を加えた。その結果、対象地域内の前期古墳には、平野部等に面した墳丘の一側面に段を設けた非対称構造を有するものが複数存在することが明らかとなった。また、地理情報システム(GIS)を利用した「可視範囲」の分析により、各古墳を視認できる範囲が明らかとなり、とくに非対称の墳丘構造を有する古墳については、一段大きく築かれた側面側に広範囲の可視範囲が想定されることが判明した。

上記のような立地や視認性の分析によって得られた成果のうち、墳丘の非対称構造を有する古墳のいずれもが、前方後円墳もしくは古墳時代前期後半に築かれた古墳である点は注目に値する。しかも、それらの古墳には広範囲の可視範囲が想定される。一方、最古段階の前方後円墳として注目される沼津市高尾山古墳は、後世の改変により墳丘の全体像が把握できないものの、墳丘の非対称構造は想定しにくく、可視範囲も狭い。

こうした前期後半を中心とした大型古墳の非対称構造や視認性については、三浦半島の西側基部に位置する逗子市・葉山町長柄桜山1・2号墳との類似性が指摘できる。それら2基の古墳の近くに同時期の拠点集落とみられる逗子市池子遺跡群が存在する点も、瓢箪山古墳と伊豆通信病院敷地内遺跡との関係に類似する。さらに広く太平洋岸の地域に目を向けると、かねてより水上交通とのかかわりが指摘されている霞ヶ浦沿岸の前期古墳では、先行して築かれたとみられる前方後円墳が前方部前面を水域側に向けているのに対し、前期後半に築かれたとみられる前方後円墳や一部の前方後方墳は、すべて墳丘の側面を水域側に向けている(滝沢 2017・2018)。霞ヶ浦沿岸の前期古墳については、墳丘構造や視認性についてのさらなる検討が必要であるが、かつての霞ヶ浦が太平洋に面した広大な内海(常総の内海)であった点を考慮するならば、前期後半の大型古墳を造営するにあたっては、東日本太平洋岸の諸地域で交通路からの視認性を強く意識した共通の指向性を有していたことが想定される。

以上の見方をふまえ、あらためて伊豆半島における前期前方後円墳の築造背景を考えるならば、三浦半島の事例と同様に、古墳時代前期後半段階になり半島を横断する陸路が重視されたことに大きな要因を求めることができる。今回判明した拠点集落の移動現象も、そのことを端的に物語るものであり、狩野川河口部にあらたに形成された拠点集落(藤井原遺跡)は、半島基部の内陸拠点(伊豆通信病院敷地内遺跡)と海上交通路を結ぶ外港的な拠点の役割を果たしていた可能性がある。

こうした理解の先には、なぜ古墳時代前期後半になって半島横断路の重要性が増したのか、という点についての歴史的評価が求められる。この点については、さらに時間的、空間的な対象を拡大した上での検討が必要であるが、あえて見通しをのべるならば、人や物資の大量運搬に適した海上交通路に比べ、半島横断路(陸上交通路)を組み込んだかたちでの交通路の利用には、異なる目的があったと推察される。のちに成立する律令期の官道(東海道など)が情報伝達を重視していたとする近年の研究成果(近江俊秀『古代国家と道路』青木書店、2006年など)をふまえるならば、半島を迂回する海上交通路を避けた陸上交通路の利用は、限られた人や情報の移動を主たる目的とし、行程の短縮を目指したものであったと考えられる。また、半島基部に築かれた前方後円墳や円形周溝墓の存在から、そうした交通路の利用形態が重視されるようになった背景には、ヤマト王権による地方支配との関係が推測される。

最後に、本研究の成果を地域史的観点で述べるならば、7世紀後半に「駿河国」の一部を割いて分置されたとされる「伊豆国」に、古墳時代前期の段階で駿河に比肩するような規模の前期古墳の存在が明らかになったことは、「伊豆国」の存立基盤を考える上で、きわめて重大な認識の変更をもたらすものであろう。この点を含め、本研究で残された課題やあらたに生じた課題については、引きつづき検討を重ねていきたい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

滝沢 誠、霞ヶ浦沿岸とその周辺の前期古墳、野本将軍塚古墳と東国の前期古墳・早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所研究論集第1冊、査読無、2018、pp.157 - 170

滝沢 誠、久永雅宏、静岡市麓山神社後古墳出土の石枕、静岡県考古学研究、査読無、49号、2018、pp.61 - 70

滝沢 誠、山下優介、河嶋優輝、伊豆半島における前方後円墳の調査 静岡県函南町瓢箪山古墳 2016・2017年度調査の概要、筑波大学先史学・考古学研究、査読有、第29号、2018、pp.51 - 67

滝沢 誠、霞ヶ浦沿岸の前期前方後円墳 土浦市王塚古墳の測量調査、筑波大学先史学・考古学研究、査読有、第28号、2017、pp.77 - 94

[学会発表](計2件)

滝沢 誠、王塚古墳・后塚古墳が語る古代の土浦、筑波大学社会貢献プロジェクト公開講座、土浦市上大津公民館、2017

滝沢 誠、古墳時代の駿河と伊豆、静岡県埋蔵文化財センター開所記念学術講演会、静岡県

〔図書〕(計2件)

伊藤純郎、山澤 学、滝沢 誠 他、筑波大学出版会、破壊と再生の歴史・人類学、2016、pp.3-25
滝沢 誠、渡井英誉、笹原芳郎、佐藤祐樹 他、筑波大学人文社会科学研究所歴史・人類学専攻、伊豆瓢箪山古墳の研究・平成 28～30 年度科学研究費・基盤研究(C)研究成果報告書、2019、112

6. 研究組織

(1)研究協力者

研究協力者氏名：菊地 吉修
ローマ字氏名：KIKUCHI, Yoshinobu
研究協力者氏名：渡井 英誉
ローマ字氏名：WATAI, Hideyo
研究協力者氏名：佐藤 祐樹
ローマ字氏名：SATO, Yuki
研究協力者氏名：笹原 芳郎
ローマ字氏名：SASAHARA, Yoshiro
研究協力者氏名：笹原 千賀子
ローマ字氏名：SASAHARA, Chikako
研究協力者氏名：田村 隆太郎
ローマ字氏名：TAMURA, Ryutaro
研究協力者氏名：戸田 英佑
ローマ字氏名：TODA, Eisuke

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。